



トークライブ・スペシャル 第2回

出版最前線からのホットな講演

“存在自体が需要を生み出すのが本 … そして持つことが出版社を支える”



3月14日(日)午後、中央図書館と葛飾図書館友の会の共催による第2回のトークライブ・スペシャルが開催されました。

みすず書房五代目社長の持谷寿夫(もちたに・ひさお)氏を迎え、『変わるものと、変わらないもの～ある人文書出版社の昨日と明日』と題し、“いま、なぜ書物なのか? 出版最前線からのホットなメッセージ!”というお話をしていただきました。

1946年創業の同社は、一般的には2年を目安にしている業界の中であって、『夜と霧』に代表されるような5～10年続くロングセラーの出版を目指している。単に情報としてではなく、形ある存在としての書籍を強調するためホワイトカバーと重厚な装丁や余白の美しさにこだわっている。出版業界は“本は存在すること自体が需要を生み出す”という特殊性を持っていることなどを強調されました。

また出版業とは、著作権を持つ著作権者から、その作品を出版物に置き換えるビジネスである。書店が減少し、本と出合う機会が少なくなり、かつ電子書籍化が進む時勢にあっても、人間が作り、紙に置き換えて世の中に出し、触れ合いや手触りを大事にする本の存在意義は変わらないはずとも述べられました。

約1時間余りの講演の後、40名を超える参加者の中から様々な質問が出され、持谷氏は淡々と丁寧に説明され、私たちには見えない出版業界の“裏側”や苦勞も語ってくれました。国民読書年である今年、“じゃあ、読もう”の合言葉だけではなく、“じゃあ、買おう”も加えて欲しい、本を持つことが出版社を支えているのだと語り、トークライブを終えました。

葛飾図書館友の会 第3回総会のお知らせ

—— 4月24日(土) 中央図書館で開催 ——

■友の会の第3回総会が下記の日程・内容で開催されます。現会員の皆様や新しく入会を希望する方々の多数の参加をお待ちしています。入会の受付も行います。

- 日時 平成22年4月24日(土) 午後2時より
場所 中央図書館会議室1
議事 (1)平成21年度事業報告、収支報告、会計監査報告
(2)会則の改定について
(3)平成22年度事業計画(案)、予算(案)
(4)役員改選ほか

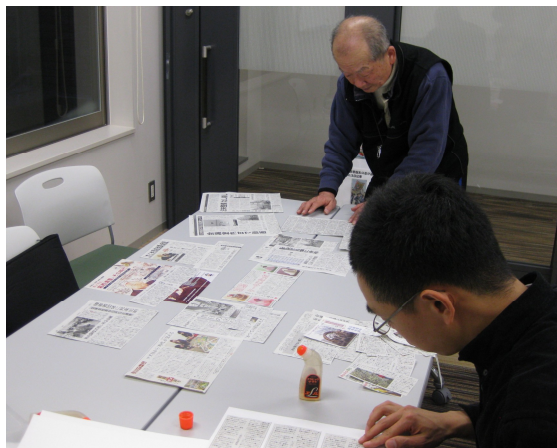
なお、総会終了後、ミニ講演会および交流会を予定しています。また現会員の皆様には別途正式に開催の御案内をメールまたは郵便でお送りします。

井戸端会議のネタづくり？

『葛飾情報スクラップブック』チームは10年先を視る

友の会活動の中でもユニークな活動を誇る、事業委員会の『葛飾情報スクラップブック』チームを覗いて見た。

チームメンバーはわずか2名(鷓木さん、赤川さん)というこじんまりとした所帯だが、やることはなかなかユニーク。掲げた目的は「葛飾のニュースや情報をみんなで収集・保存し、10年後でも参照できる、地域を知るための資料作成」そして「収集したニュースや情報をテーマに意見交換、住民間の交流を深める」というもの。この資料を話題に井戸端会議が開催され、「ワイワイがやがや」おたがいが盛り上がることをねがっているのだ。



現在、会員からの日刊全国紙やスポーツ紙、雑誌からの切抜き提供をもとに、スクラップブックを作成し、表題をつけて整理、ボランティアルームで回覧していたが、このたび念願かなって中央図書館「かつしかコーナー」でパネルおよびスクラップブックの展示もスタートした。

資料の範囲は切り抜きだけでなく、葛飾の風景スナップ、イベントなども募集して内容をふくらませ、会員活動の柱にしたいと鷓木さんは熱っぽく語ってくれた。作業は毎月、月初の土日に中央図書館のボランティアルームで行われている。

会員の皆さんもぜひ一度覗いて、興味をもたれた方は遠慮なく参加して下さい。

「葛飾区立図書館のあゆみ展」の略年表と写真

— 鎌倉図書館などへの展示に協力 —



1月31日(日)午前、中央図書館の開館を記念して、これまで事務室への通路の壁に掲示されていた「葛飾区立図書館のあゆみ展～略年表と写真～」を鎌倉図書館に貼る作業をおこないました。この年表は1949年葛飾区初の図書館(現立石図書館)の開館から現在までの半世紀にもわたる葛飾区内にある図書館の歩みを、区の動向や国内の主な出来事、そしてベストセラーの変遷にあわせて示したものです。

4名の友の会会員が鎌倉図書館の入口左横の2階へ上がる踊り場の壁に年表を、そして階段の両側にかけて34枚の写真パネルを1時間足らずで掲示しました。鎌倉図書館は所蔵している該当のベストセラー本を中心に、3月22日まで展示しました。

3月下旬から5月上旬までは、お花茶屋図書館に移動し、区内の図書館へ展示されていく予定です。友の会は今後も展示に協力していきます。

葛飾区立図書館ホーム・ページにアクセス！

<http://www.lib.city.katsushika.lg.jp/>

「友の会通信」のバックナンバーが掲載されています。

“中央図書館との協力関係に学びたい”

1月11日(日・祝)、墨田図書館友の会の皆さんが中央図書館の見学と当会との交流のため、来訪されました。女性8名と男性2名の計10名が図書館職員の案内で約1時間、館内を見学した後、当会からは朝野会長と鶴岡副会長をはじめ5名、図書館からは2名の参加を得て、会議室で交流会を開催。

墨田図書館友の会は1999年設立、会員数は現在20余名、月1回の集まりや読書会・勉強会や講演会などをほぼ定期的に行っていることなど、また墨田区の図書館の現状について中央図書館がない、一般の利用者や住民との共同の催し・懇談・協議の場がないなど、厳しい状況にあるとの説明がありました。そして相互の質疑応答があり、中央図書館開館までに利用者や友の会の提言や要望を図書館側が積極的に取り入れたことや、開館後も当会と図書館との連携した活動が円滑に進められていることなどに“うらやましい”“参考にさせてもらう”との声が多くあがりました。

今回来訪された方々の多くが朗読や音訳ボランティアをされており、録音室やボランティア室などの設備が充実しているのにも驚いた様子。障害者サービスが充実しているという墨田区に相応しい図書館の誕生が待たれます。今後も交流を続けることを確認し、予定時間を大幅に超えた交流会を終えました。なお3月17日に市川図書館友の会の皆さんが来館されました。(詳細は次号で掲載する予定です)



区内の図書館探訪記 第5回

広報委員会は、区内の図書館を順次訪問・取材しています。
おたずねした四つ木地区図書館さん、ご協力ありがとうございました。

■四つ木地区図書館

小学校に隣接した手作り感あふれる地区図書館



京成四ツ木駅から徒歩10分、水戸街道を歩道橋で渡ってすぐのよつぎ小学校敷地内に、四つ木地区図書館はある。このためか小学生の利用率は区内の他の図書館とくらべてかなり高いとのこと。よつぎ小学校とは扉でつながっており、週一度、水曜日の20分休みには扉が開かれ、小学生たちが図書館に上履きのまま本を借りにくる。よつぎ小学校の生徒は「よんだよカード」を持ち、読んだ冊数に応じて認定証カードがもらえ、しかもこの認定証にはレベルがあり、読めば読むほど高レベルの認定証がもらえる。ご褒美の図書館員手作りのしおりや、本の紹介掲示など、児童室には子供たちに本を読んでほしいという気持ちがあふれていた。

児童室とほぼ同規模の一般室は小さいながらも、利用者重視の本揃え。料理、裁縫、家政関連の書籍は30歳代主婦の要望に応え、この規模としては充実している。医学、薬学関連の書籍が多いのは70歳代の利用者が多いためとのこと。

特に目を引いたのが「文庫版時代小説コーナー」。高年齢層が好む時代小説を文庫コーナーの一箇所に集め、作者別、巻号順に並べられている。ここには「時代小説をもっと楽しむための資料コーナー」という棚もあり、時代背景や作家につ



いての本、雑誌「歴史読本」などが並び、^{ヤングアダルト}YAコーナーも小説・ライトノベルが充実、コーナー脇には「ヤングアダルト新刊案内」、その隣には「よつぎちくとしょかんいん オススメの本」が掲示されており、これらがすべて手作り。閲覧席は10席、非常勤職員5名と臨時職員で運営されている小さな図書館だが、地域の利用者と密接につながった図書館員の、熱意あふれる手作り感満載の素敵な図書館であった。(取材 / 矢野・林)

心にのこる私の一冊 ③

ショーペンハウエル『読書について 他二篇』斎藤忍随 訳 (岩波文庫)

本を読むと考える力を失う？

川島 勉

世の中、読み書きができないと不便で不利だ。しかし少数とはいえ、地球上に存在する無文字社会にも言葉の世界が口承によって豊かに息づいている。「文化」なるものが文字をもつ側の占有物ではないことは明白であり、読み書きの価値もまた相対的なのだ。読書の効用を説く論の多くは、しょせん文字を使う側に属する者の独善か自画自賛の域を出ない。

“デカンショ”の一人とされる、かのショー先生は、「読書は、他人にもものを考えてもらうことである」「ほとんどまる一日を読書に費やす勤勉な人間は、しだいに自分でももの考える力を失っていく」と断言し、“本を読むと考える力がつく”といったあやしいジョークを一蹴する。ショー先生の主張は良書主義的、エリート主義的な展開を見せるが、「食物は食べることによってではなく、消化によって我々を養う」とも。なるほど、本も読み方しだいというわけか。われら凡人には“ものを考えないための読書”も必要なんですけどね。

それにつけても依然として根強い“読書＝善”の物語。図書館も利用者もそうした物語をさっさと卒業して、自らを解放したい。図書館友の会の会員の発言としてどうかとも思うが、はっきり言って、読書なんかしてもしなくてもよいのだ。しかし、そう確信できるようになったのは、正直なところ、読書のおかげかもしれない。ショー先生の『読書について』は、心に「残る」というより、いまだに「ひっかかっている」一冊といえようか。



(かわしま・つとむ 葛飾図書館友の会事業委員長)

「葛飾図書館友の会」で一緒に活動してみませんか！

『友の会』は多くの会員によって活動しています。図書館を利用されている方、活動趣旨に賛同される方々、是非ご入会いただき、あなたの図書館に関わるいろいろなアイデアを少しずつ実現してみませんか？

入会にあたっては図書館に入会届けをご提出の上、年会費（一般会員 1,000 円、賛助会員 2,000 円）を下記の口座へ納入して下さい。なお図書館での直接納入はできません。

「通信欄」に一般あるいは賛助会員かを明記の上、22年度年会費とご記入下さい。振替手数料は銀行窓口では120円、ATMからでは80円です。恐れ入りますが、ご負担をお願いいたします。

ゆうちょ銀行	口座番号	00100-7-392065
	口座名称	葛飾図書館友の会

●問い合わせ・連絡先は下記の通りです。

図書館担当者（玉川さん、吉村さん、清水さん）Tel 03-3607-9201

取材担当の私はインターネットを使わない（使えない）が、メルアドは一応持っているのでも、送られてきたメールへの返事を書きし、ワイフに送ってもらうというアナログ人間だ▼今や製造しない工社のルポで書いた原稿を紙面制作担当者へファックスで送信・入力してもらおうという手間と迷惑をかけているテイタラクさで、受け取る側には申し訳ない話だが、自分やる気にはならない▼本紙は中央図書館では入口2ヶ所に置かれており、行く度にその減り方を見るのが楽しみで、前号は増刷するほど持って行ってくれているのは嬉しい限りだ▼「友の会」に入り、会員の皆さんとお付き合いさせていただいているが、いろいろな特技をもった人たちが多く、ここまでやれるのかと思わず唸る機会も多い、人材豊富な会だ▼本好き・図書館好きだけでは出来ない話だが、その熱意とアイデアに感心させられる人や場によく出会う▼退職後始めたボランティアを続けているが、最近では社員時代よりも忙しいので好きな読書の時間があまり取れなくなり、借りてきた本が数年前に読んだものだったというお馬鹿なケースが多い▼出会の面白さを感じながら読まれる紙面作りを今後も心掛けていきたいものだ。

（中里広報委員）

色えんぴつ